

第8章 子どもパネルデータの分析（2） 非認知能力

平田 誠一郎

とよなか都市創造研究所 研究員

<目次>

1. はじめに
2. 家庭 SES と非認知能力
3. 保護者による働きかけと非認知能力
4. 社会関係と非認知能力
5. 居場所・ポジティブ経験と非認知能力
6. まとめ

1. はじめに

本章では、構築された子どもパネルデータの中でも、初年次となるアンケートの回答のうち、非認知能力に関する項目に関して詳細を見ていく。

非認知能力とは、知能（IQ）や学力などの認知能力と異なるが、「思考や感情や行動について個々人がもつパターンのようなもの」である心理特性（小塩 2021：1-2）を指す。代表的なものとして自己肯定感や物事をやり抜く力（「グリット」と呼ばれる）、難しい課題に挑戦する力などが挙げられる。非認知能力は個人において時間的に安定した特性である一方、知能に比べて遺伝要因の影響が小さく、環境要因によって変化可能であることが指摘されている。すなわち教育を始めとする介入によって向上させることのできるスキルであり、近年その可能

性が注目されているのである（小塩 2021：4-9）。

このような非認知能力については、全国学力・学習状況調査の質問紙調査にも組み入れられており、子どもたちの学び・育ちを考える上でも重要な指標である。そこで「とよなか子どもプロジェクト」においても、アンケート調査に非認知能力に関する項目を組み込み、実態の把握と分析をできるように設計した。

以下では、本プロジェクトが初年度ということもあり、行政データやアンケートの他の項目とのクロス集計による基礎的分析の結果を示していく。非認知能力と掛け合わせる項目としては「家庭 SES」「保護者による働きかけ」「社会関係」「居場所・ポジティブ経験」の4つを選んだ。

図表のグラフにおいて、各学年および回答者全体を合計した状況と、あわせてそれぞれカイ

2乗検定の有意水準を示している。記載方法はこれまでの章と同様である（***:0.1%水準、** :1%水準、* :5%水準、+ :10%水準）。また一部のグラフにおいては、回答者全体を合計したカテゴリに学年が判別できなかった回答も含めている。

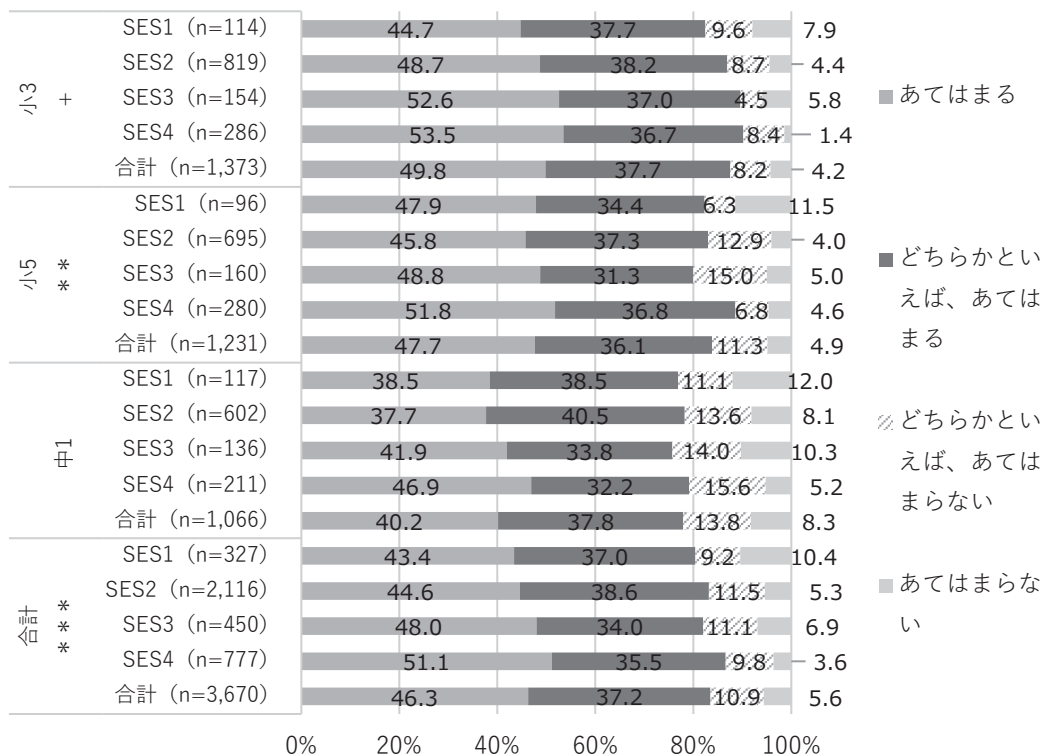
2. 家庭SESと非認知能力

まず、行政データから得られた家庭のSESと非認知能力の関係について見ていきたい。以下の図表8-1は一般に自己肯定感を示す「自分には、よいところがある」という設問への回答を、家庭SESごとに集計したものである。全体的な傾向としては、SESが高くなるにつれ「あてはまる」という回答を選択する割合が増えている。また学年が上がるにつれ、「あてはまる」という回答を選択する割合が減少している。小3・小5ではSESと回答の関係に一定の統計的

有意性があるものの、各学年とも「あてはまる」と答える割合の最大値と最小値の差は約6～9ポイントの範囲に収まっている。

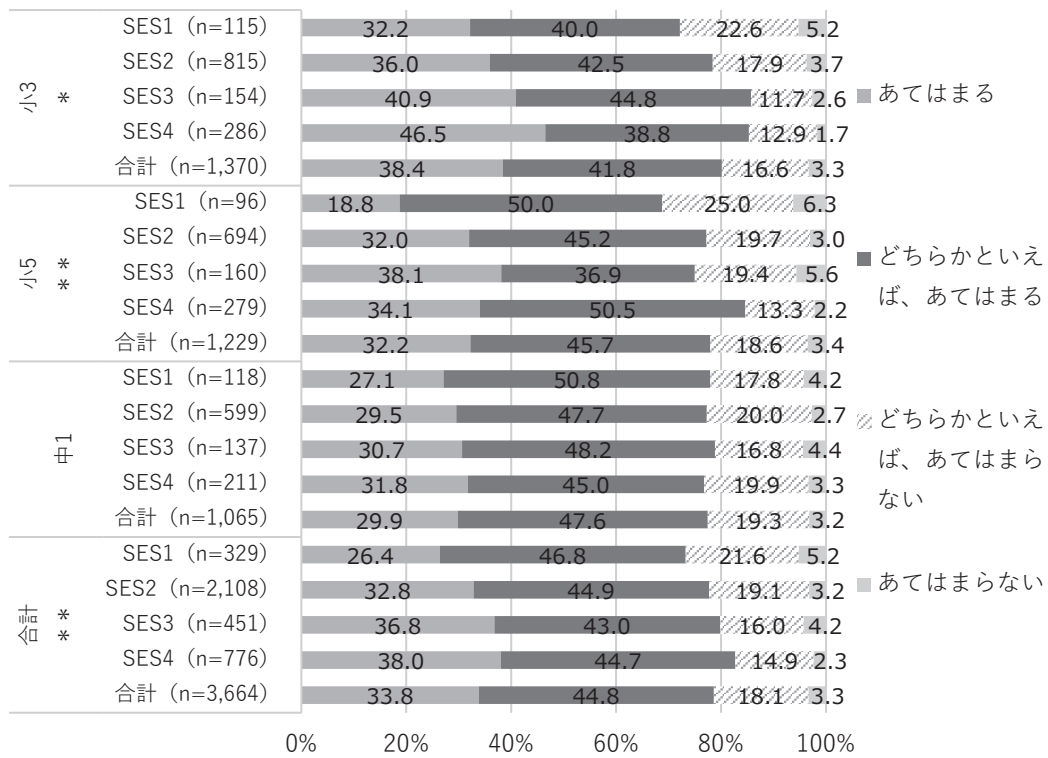
次の図表8-2は、同じく非認知能力を測る設問として多く用いられる「自分でやると決めたことは、やりとげるようにしている」という項目への回答を家庭SES別にまとめたものである。「あてはまる」という回答を選ぶ割合に着目すると、特に小3・小5においてSES1とSES3・4との差が大きいことがわかる。また、小5のSES1で「あてはまる」という回答を選ぶ割合が他と比較して大幅に少なくなっている。これは本年度のみの状況であるのか、継続して見られるのかを、次年度以降も留意が必要である。中1については、SESごとの差は、全体的に縮小しており、SES間の差も統計的に有意ではない。

「自己肯定感」「やり抜く力」の両方において、SESによる差は若干あると言える。



図表8-1 「自分には、よいところがある」家庭SES別集計

第8章 子どもパネルデータの分析 (2) 非認知能力



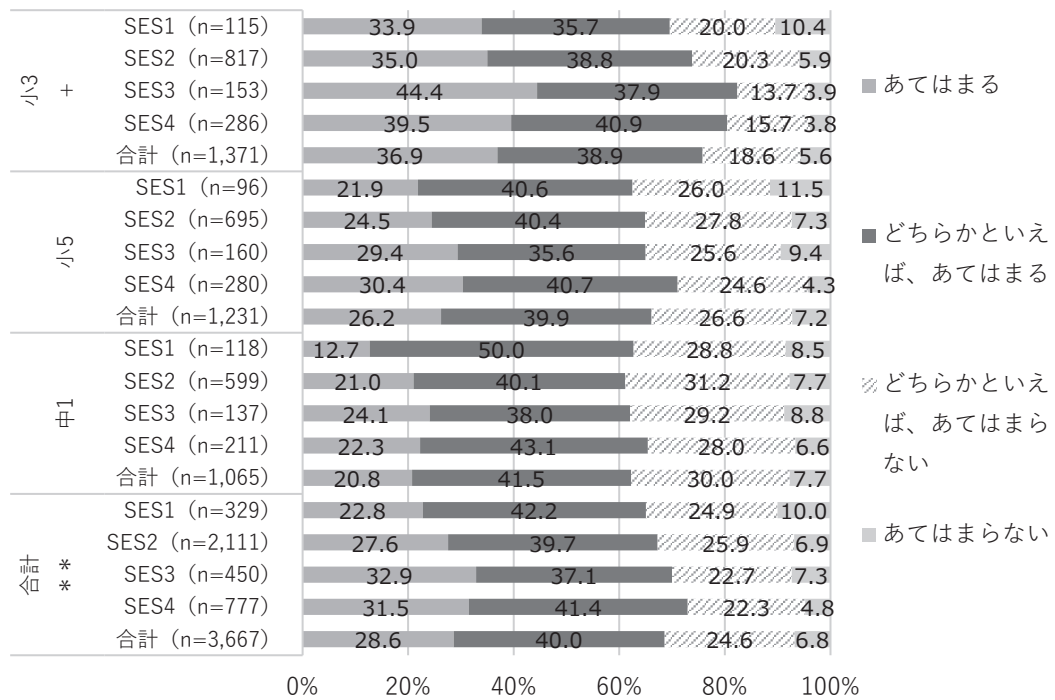
図表8-2 「自分でやると決めたことは、やりとげるようにしている」家庭SES別集計

続く図表8-3は「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している」という設問への回答を、家庭SES別に集計したものである。小3では10%水準で統計的有意性が確認され、SES3とSES4で肯定的回答（「あてはまる」と「どちらかといえば、あてはまる」）の割合が80%程度と高くなっている。他方、その他の学年ではSESと回答の関係に統計的有意性はなく、ど

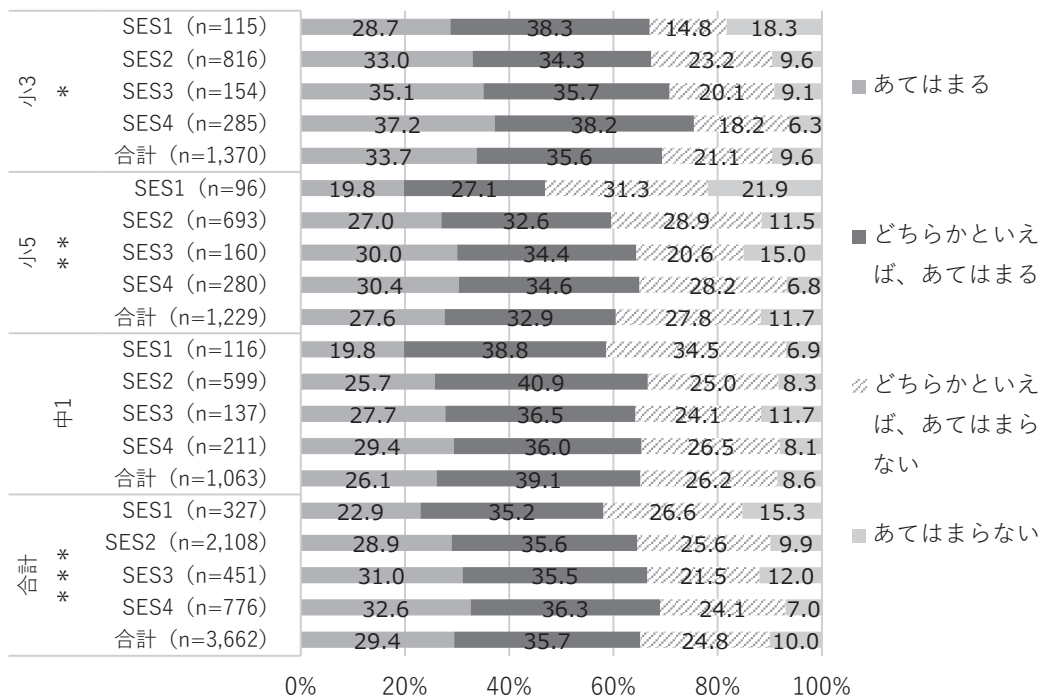
のSESも回答の分布が似通っている。

図表8-4は「自分とちがう意見について考えるのは楽しい」という設問への回答の、家庭SES別集計である。小3と小5で有意な結果となっており、とりわけ小5においてSES1とそれ以外で肯定的回答の割合に差が生じている。中1においてもSES1とそれ以外で差はあるが、統計的に有意な結果とはなっていない。

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



図表8-3 「難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している」家庭 SES 別集計

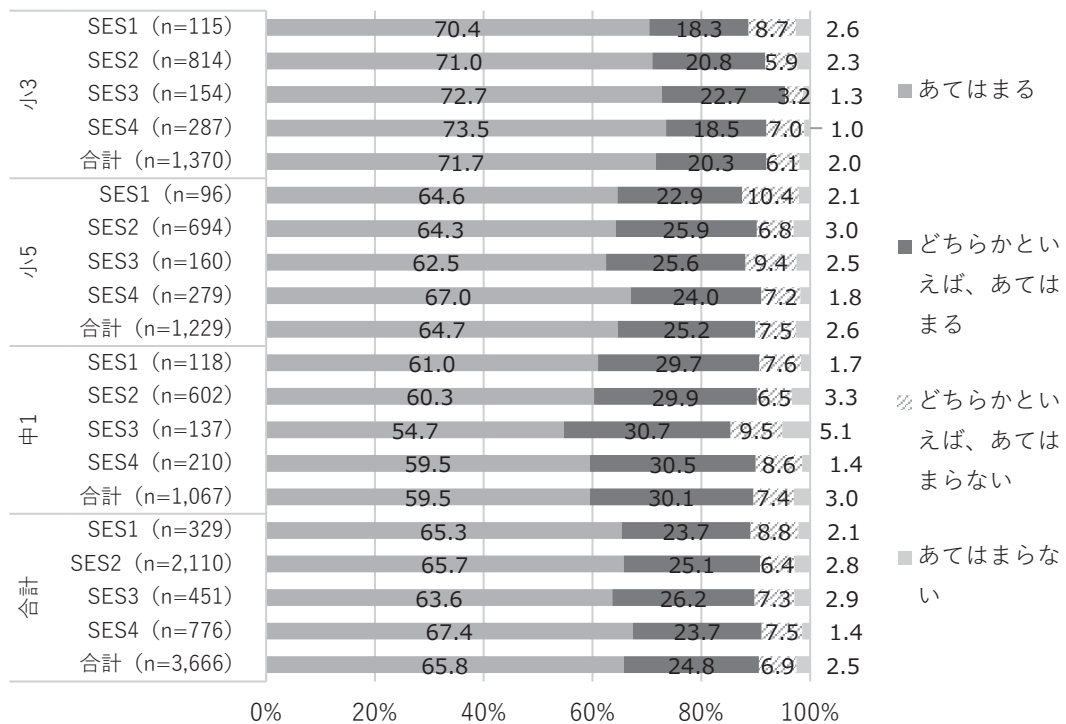


図表8-4 「自分とちがう意見について考えるのは楽しい」家庭 SES 別集計

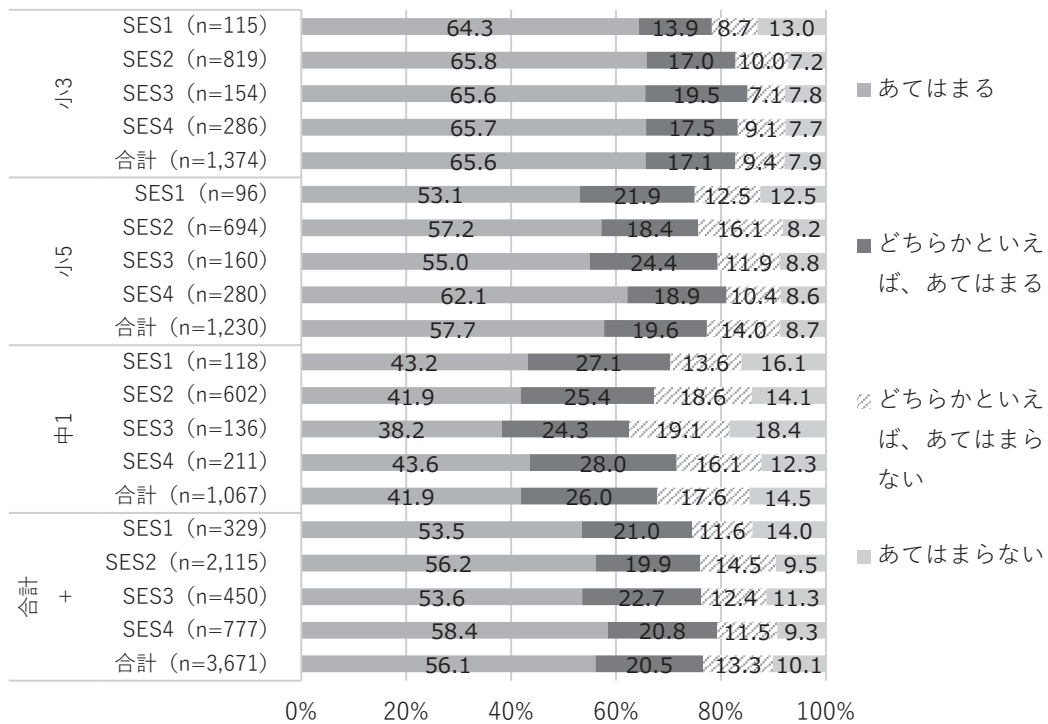
第8章 子どもパネルデータの分析 (2) 非認知能力

図表 8-5 は「友だちと協力するのは楽しい」という項目への回答を家庭 SES 別に集計したものである。この項目に関しては、肯定的回答の割合が各学年内で似通っており、統計的にも有意な結果となっていない。すなわち、家庭 SES と友達との協力への意識（協調性）はこの結果を見る限りあまり関連していないということである。

図表 8-6 は「自分の将来の夢や、目標を持っている」という項目への回答の家庭 SES 別集計である。この項目も、各学年では統計的有意性がなく、家庭 SES との関連性は確認できなかった。ただ学年間で比較すると中 1 では肯定的回答の割合が小学生に比べて全体的に低くなっている。



図表 8-5 「友だちと協力するのは楽しい」家庭 SES 別集計



図表 8-6 「自分の将来の夢や、目標をもっている」家庭 SES 別集計

3. 保護者による働きかけと非認知能力

続いて、保護者による働きかけと非認知能力との関係を示す。保護者アンケートでは、子どもに対する働きかけについて尋ねている。そのなかの「子どもと学校の出来事について話す」という項目への回答と、子どもアンケートで得られた非認知能力とをクロス集計した。

図表 8-7 は保護者の「子どもと学校の出来事について話す」という項目と、子どもの「自分には、よいところがある」という項目を掛け合わせたものである。図表 8-7 をはじめ、本節での保護者側の回答では、「あてはまらない」が n 数の少ないカテゴリーになっている。そのためここでの統計的検定の結果は参考として提示し、回答の現状を示すことに重点を置くこととする¹。

各学年内で保護者側の「あてはまる」と「どちらかといえば、あてはまる」という回答数の多い2つの項目をとって見ても、子ども側の項目で「あてはまる」と答える割合には働きかけの度合いによる差がある。また、保護者が「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答するケースが、それ以外のケースに比べ子どもの自己肯定感が高い傾向がある。以上を通して見ると、保護者が「子どもと学校の出来事について話す」ことがより多い子どもほど、自己肯定感も高いという結果になっている。

同様の集計を「やりぬく力」である「自分でやると決めたことは、やりとげるようにしている」という項目について行ったのが図表 8-8 に示した結果である。保護者側の「あてはまる」と「どちらかといえば、あてはまる」を比較すると、子ども側の「やり抜く力」の回答にも

¹ このような場合に、統計的により安定した結果を得るための集計上の工夫は考えられるが、次年度以降の分析にお

ける課題とし、今年度はまず回答状況を示すことにしたい。

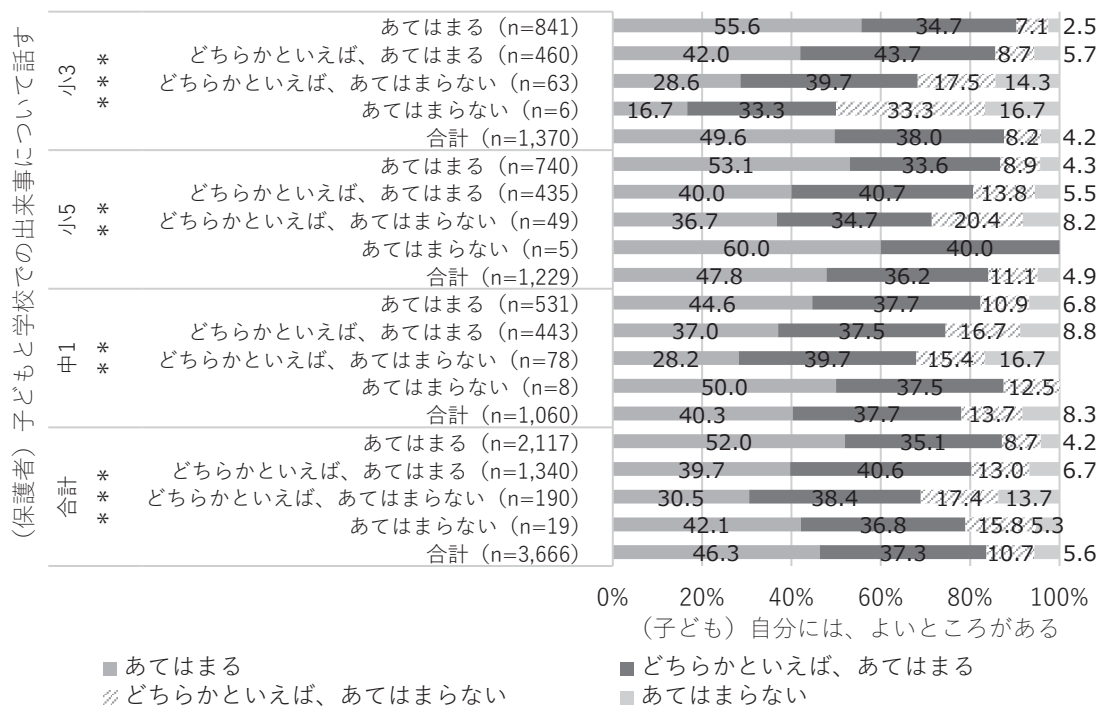
第8章 子どもパネルデータの分析 (2) 非認知能力

10ポイント前後の差が出ており、保護者からの働きかけの度合いが高い子どもほど、「やりぬく力」も高くなっていることがわかる。

また図表8-9は、図表8-7における保護者の働きかけと子どもの自己肯定感を掛け合わせた集計を、家庭SESが厳しい層に限って行った結果である。ここでは統計的な結果をより安定させるため、第7章の「6. レジリエントな児童生徒・家庭の特徴」と同様の操作を行った。すなわちSES1全体と、SES2のうち保護者アンケートで暮らし向きが「やや苦しい」「大変苦しい」と回答したケースを合わせて、修正SES1としている。以下、本章で修正SES1と

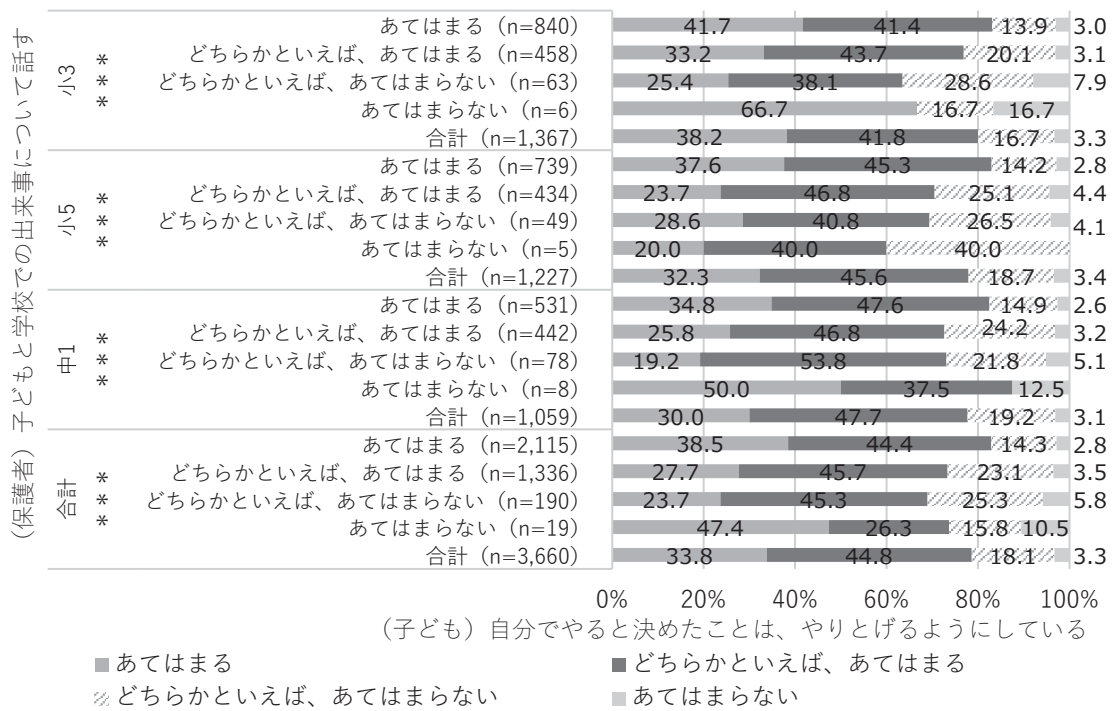
呼ぶものは、すべてこの操作を行ったものである。

図表8-9では、修正SES1においても保護者側の回答のカテゴリーでn数の少ない項目があり判断は難しいが、保護者からの働きかけについて「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答しているケースは、「どちらかといえば、あてはまらない」に対して子どもの自己肯定感が高くなる傾向にある。家庭SESが厳しい層においても、保護者の働きかけと子どもの自己肯定感、一定の結びつきがあるという可能性を考えてよいと思われる。

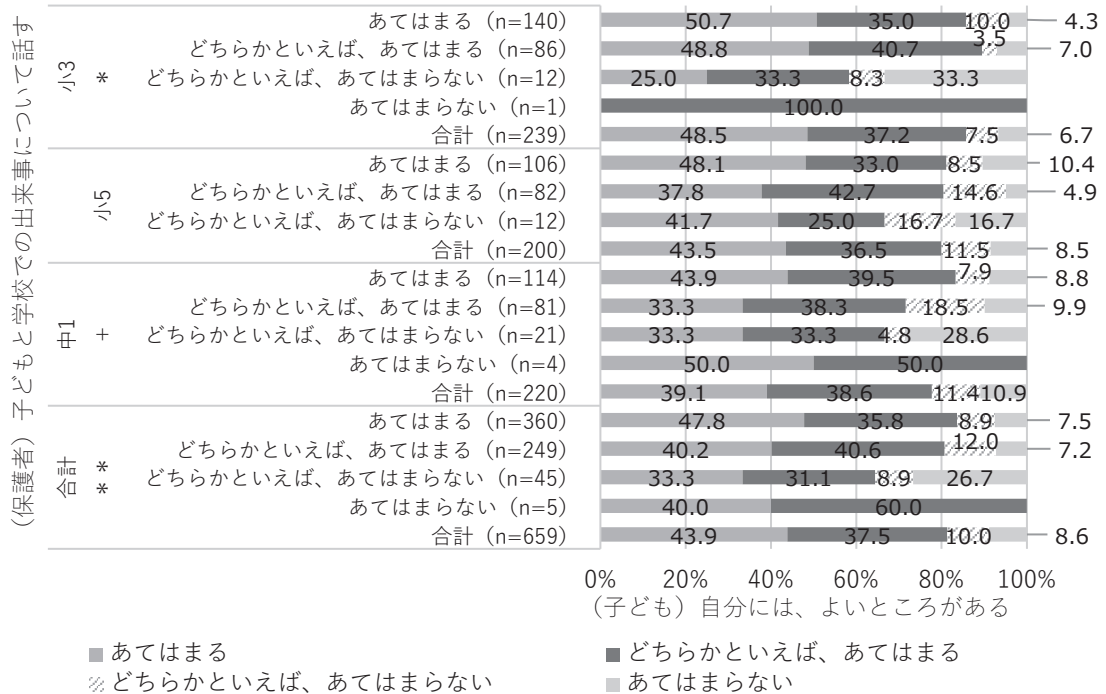


図表8-7 「子どもと学校での出来事について話す」(保護者・縦軸)と「自分には、よいところがある」(子ども・横軸)のクロス集計

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



図表8-8 「子どもと学校での出来事について話す」(保護者・縦軸)と「自分でやると決めたことは、やりとげるようにしている」(子ども・横軸)のクロス集計



図表8-9 「子どもと学校での出来事について話す」(保護者・縦軸)と「自分には、よいところがある」(子ども・横軸)のクロス集計(修正SES1のみ)

4. 社会関係と非認知能力

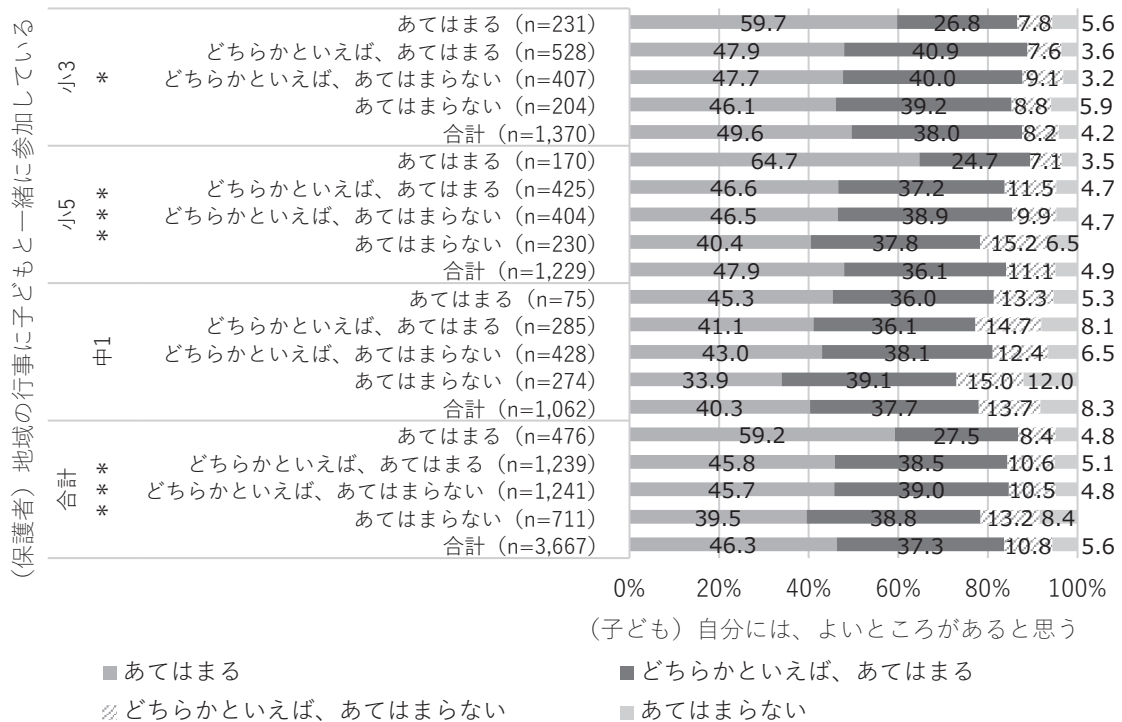
次に、保護者アンケートで地域行事への参加や、地域に関する印象を尋ねた項目と子どもの非認知能力との関係を見ていきたい。図表8-10は、保護者が地域の行事に子どもと一緒に参加している度合いと、子どもの自己肯定感の関係を示したものである。

特に小3・小5において、「地域の行事に子どもと一緒に参加している」という項目に「あてはまる」と答えている保護者の子どもは、それ以外の項目を選んでいる場合に比べて自己肯定感が高く、小3・小5では統計的にも有意な結果となっている。一方で、中1では、保護者の回答と子どもの自己肯定感の関係は統計的に

は有意でない。

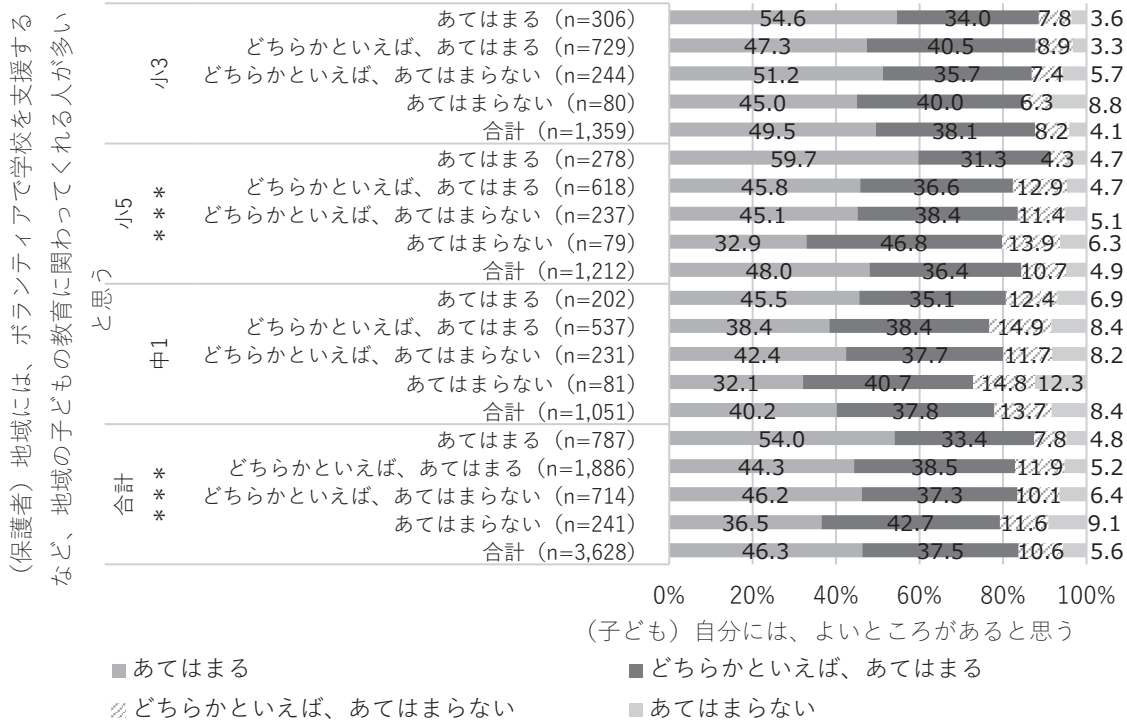
また、地域の印象について「地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どもの教育に関わってくれるひが多いと思う」という項目で保護者に尋ねた結果が図表8-11である。ここでも「あてはまる」を選択する保護者の子どもが、それ以外の場合に比べて自己肯定感が高いという結果が出ている。なお、この集計においても、小3・中1では保護者の回答と子どもの回答の統計的関連性が弱く、小5で有意であるが、小3・中1では有意でない結果となっている。

以上2つの集計を通してみると地域との関わりは、特に小学生の時期においてより影響が大きいのではないかと考えられる。



図表8-10 「地域の行事に子どもと一緒に参加している (保護者・縦軸)」と「自分には、よいところがあると思う」 (子ども・横軸) のクロス集計

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究



図表 8-11 「地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どもの教育に関わってくれる人が多いと思う」(保護者・縦軸)と「自分には、よいところがあると思う」(子ども・横軸)のクロス集計

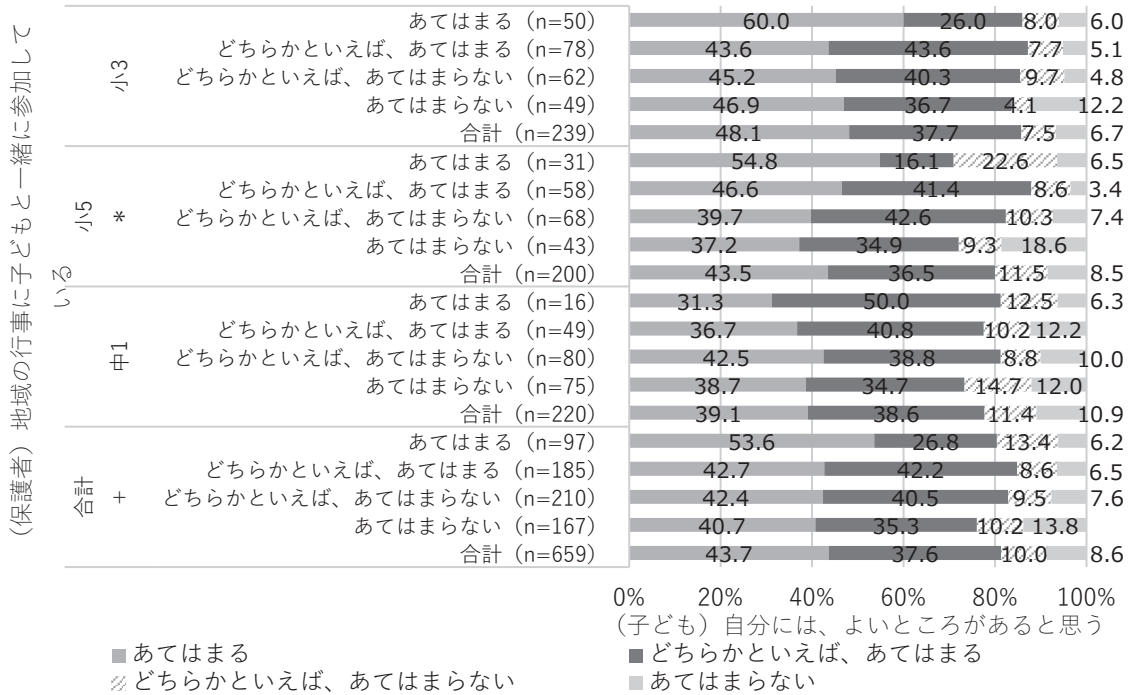
社会関係についても、SESの厳しい層に限定した集計を行った。ここでも保護者の回答でn数の少ないカテゴリーがあり、参考として提示する。

図表 8-12 は保護者が地域の行事に子どもと一緒に参加していることと子どもの自己肯定感を修正 SES1 のみで集計したものである。小5では、保護者の地域行事への参加が「どちらかといえば、あてはまる」という層で、子どもの自己肯定感(「あてはまる」と「どちらかとい

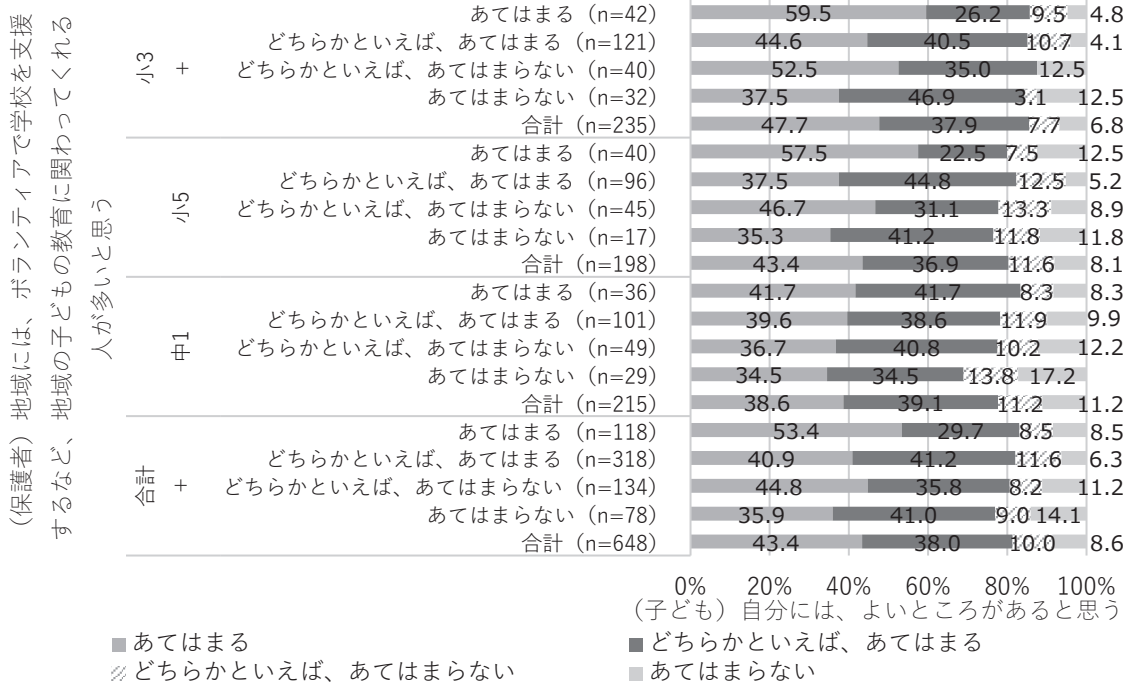
えば、あてはまる」の合計)が、他の層に比べて高い。しかし、他の学年では保護者の回答による目立った差は見受けられない。

図表 8-13 は保護者の地域の印象(地域には子どもの教育に関わってくれる人が多い)と子どもの自己肯定感の修正 SES1 のみの集計である。全体を通じて保護者の回答による子どもの自己肯定感の違いは少ない。先の集計と合わせ、SESが厳しい層では社会関係と非認知能力の関係はあまり見出せないように思われる。

第8章 子どもパネルデータの分析 (2) 非認知能力



図表 8-12 「地域の行事に子どもと一緒に参加している (保護者・縦軸)」と「自分には、よいところがあると思う」(子ども・横軸) のクロス集計 (修正 SES1 のみ)



図表 8-13 「地域には、ボランティアで学校を支援するなど、地域の子どもの教育に関わってくれる人が多いと思う」(保護者・縦軸) と「自分には、よいところがあると思う」(子ども・横軸) のクロス集計 (修正 SES1 のみ)

5. 居場所・ポジティブ経験と非認知能力

非認知能力に関する集計の最後に、家や学校以外の居場所の有無、また家庭や友人関係などの中で自分が認められるなどのポジティブな経験と非認知能力の関係をとり上げる。居場所については、サードプレイス（第三の場所）の存在が子どもの自尊感情と関連しているという研究 (Fujiwara et al. 2020) があり、またポジティブな経験は近年、人が逆境を乗り越える力（レジリエンス）を育む要素の一つとして注目されている（三谷 2023）。

まず居場所の有無については、子どもアンケートで「あなたは、おうちや学校のほかに、ほっとできたり、安心して話をできたりする場所がありますか」という設問で尋ねている。これに対する回答結果と子どもの非認知能力とを掛け合わせたのが以下に示す図表 8-14 である。

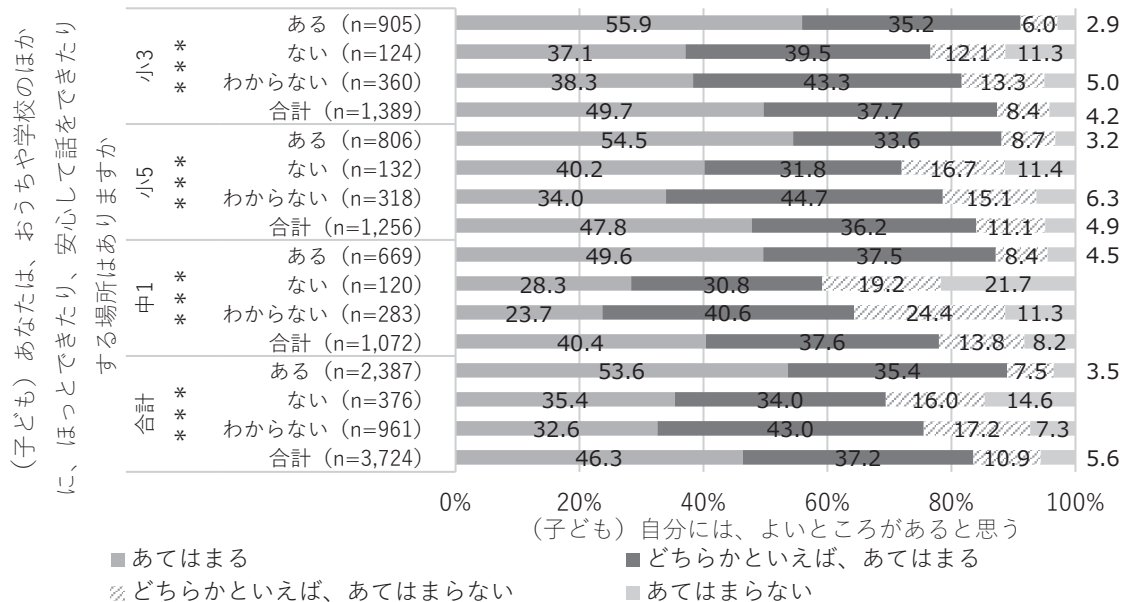
全体として「居場所がある」と答えたグループがそれ以外に対して、「自分にはよいところ

がある」の項目で「あてはまる」を選択する割合が多く、自己肯定感が高い。居場所の有無による差は、特に中1において、小3・小5に比べて顕著に表れている。また全学年で統計的に有意な結果となっている。

また図表 8-15 に示したように、「やりぬく力」である「自分でやると決めたことは、やりとげようとしている」の項目に関しても、同様に居場所が「ある」層が「あてはまる」を選択する割合が高く、やはり中1において回答割合の差が顕著に表れている。

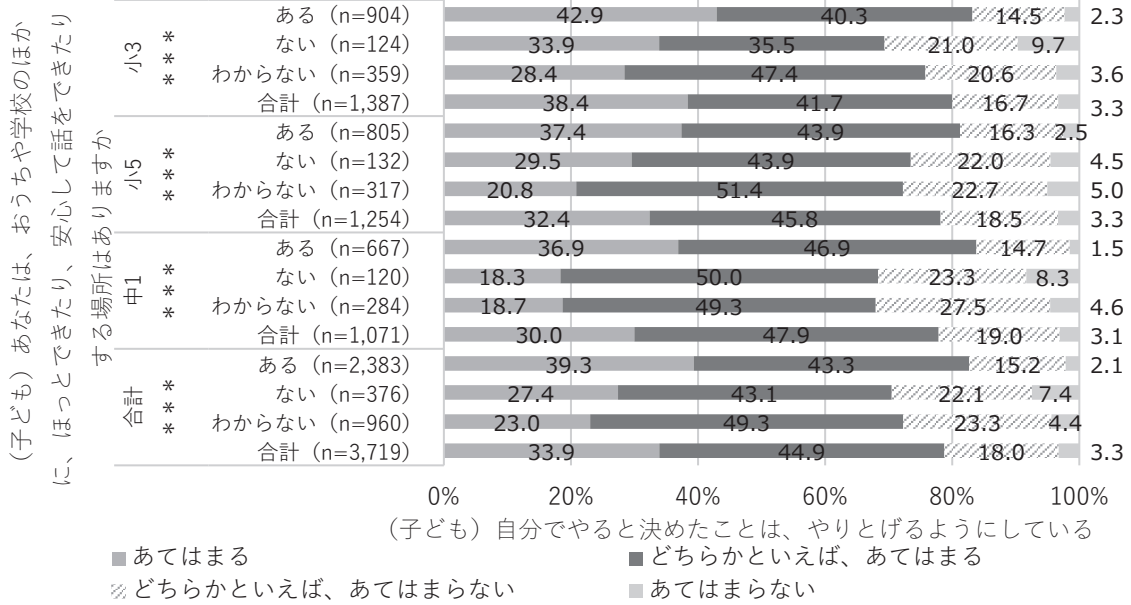
以上の集計結果のいずれも統計的に有意であり、子どもの非認知能力の高さと居場所の存在が関連していることが分かる。

なお、SES が厳しい層に関しても、修正 SES1 における居場所の有無と自己肯定感の関係を図表 8-16 に参考として示した。ここでも居場所の存在が、子どもの自己肯定感にポジティブな影響関係にある可能性がうかがえる。

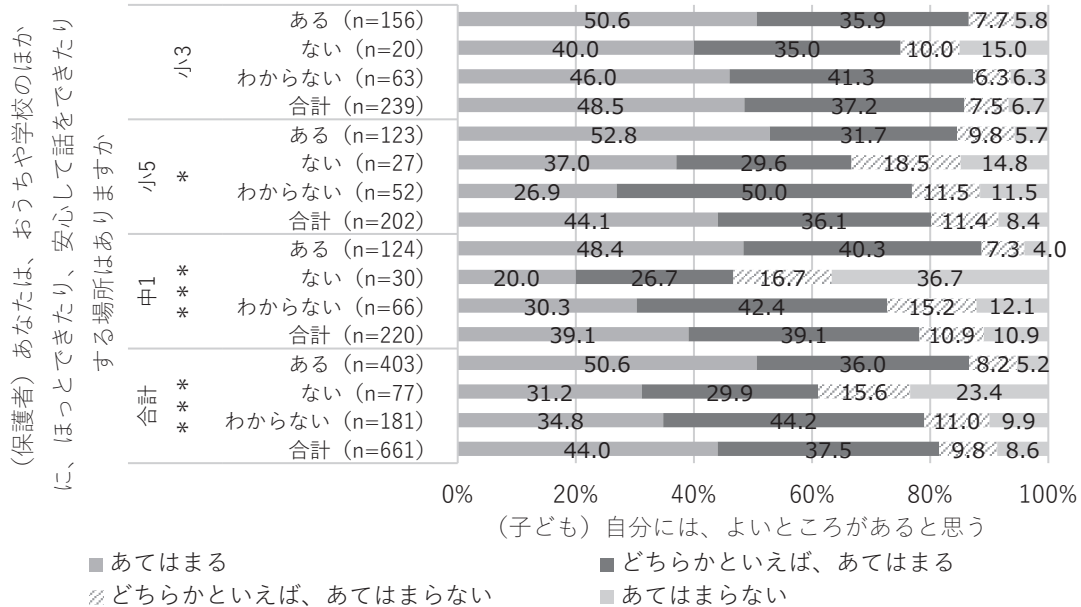


図表 8-14 「あなたは、おうちや学校のほかに、ほっとできたり、安心して話をできたりする場所がありますか」(子ども・縦軸)と「自分には、よいところがあると思う」(子ども・横軸)のクロス集計

第8章 子どもパネルデータの分析 (2) 非認知能力



図表8-15 「あなたは、おうちや学校のほかに、ほっとできたり、安心して話をできたりする場所がありますか」(子ども・縦軸)と「自分でやると決めたことは、やりとげようとしている」(子ども・横軸)のクロス集計



図表8-16 「あなたは、おうちや学校のほかに、ほっとできたり、安心して話をできたりする場所がありますか」(子ども・縦軸)と「自分には、よいところがあると思う」(子ども・横軸)のクロス集計(修正SES1のみ)

ポジティブな経験については、家庭でのコミュニケーションに関する項目を代表的なもの

として取り上げた。子どもアンケートでの「あなたが話すことを、おうちのひとはしっかり聞

調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究

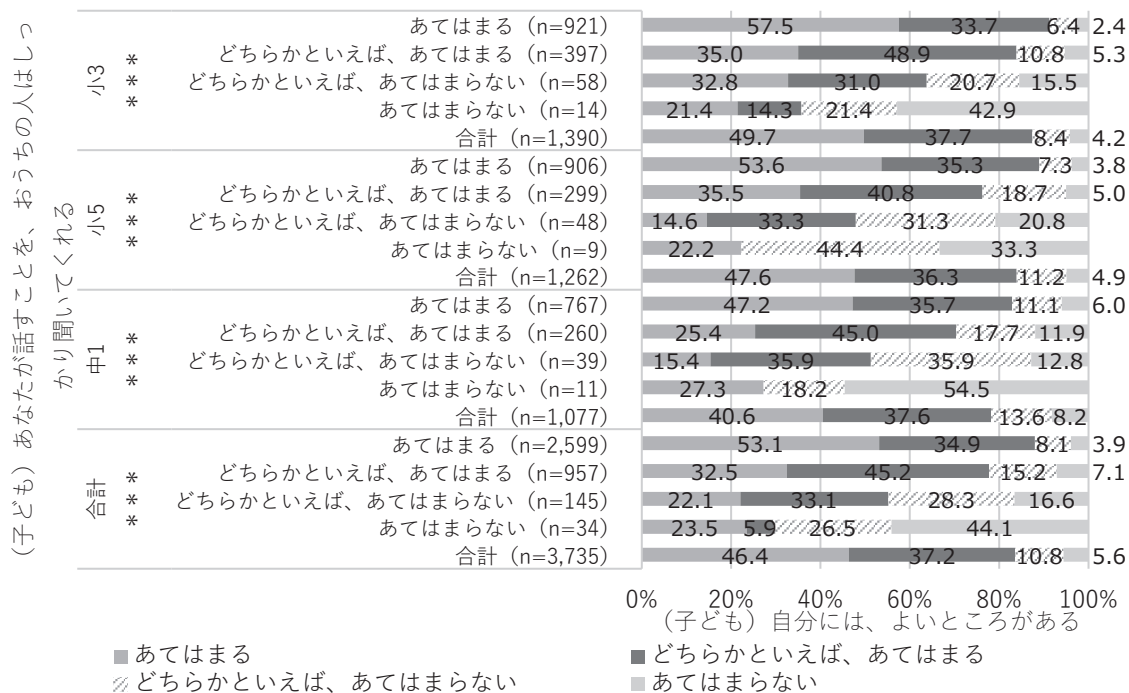
いてくれる」という設問への回答結果と、子どもの非認知能力を組み合わせている。

集計の項目も居場所と同様のものを以下に示すが、保護者側の回答にn数の少ないカテゴリーがあり、参考として提示したい。図表8-17は自己肯定感とポジティブ経験を掛け合わせたものであり、「おうちの人はしっかりと聞いてくれる」と答えた子どもほど自己肯定感も高くなっている。

図表8-18に示した「やり抜く力」に関して同様である。ここでは保護者側の「しっかりと聞いてくれる」という項目で「あてはまる」を選んだ層が、同じく保護者側の「どちらかといえば、あてはまる」を選んだ層に対して、子

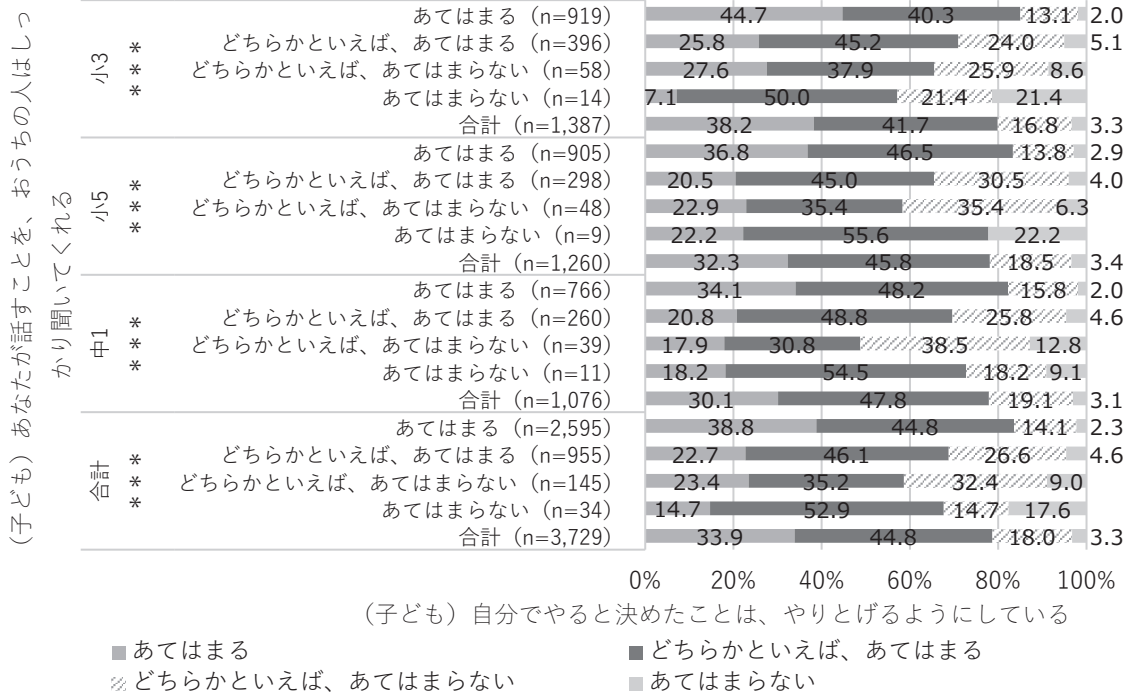
どもの自己肯定感での「あてはまる」「どちらかといえば、あてはまる」の合計が各学年ともに多くなっている。各学年においてポジティブ経験もまた、非認知能力と正比例の関係にあることがうかがえる結果である。

図表8-19には、修正SES1に限定しての集計を示した。ここでは自己肯定感と「おうちの人はしっかりと聞いてくれる」というポジティブ経験を掛け合わせているが、すべてのSESを合計した図表8-17と同様の傾向を示している。SESが厳しい層においても、ポジティブ経験は子どもたちの自己肯定感と正の関連を示すのではないかと考えられる。

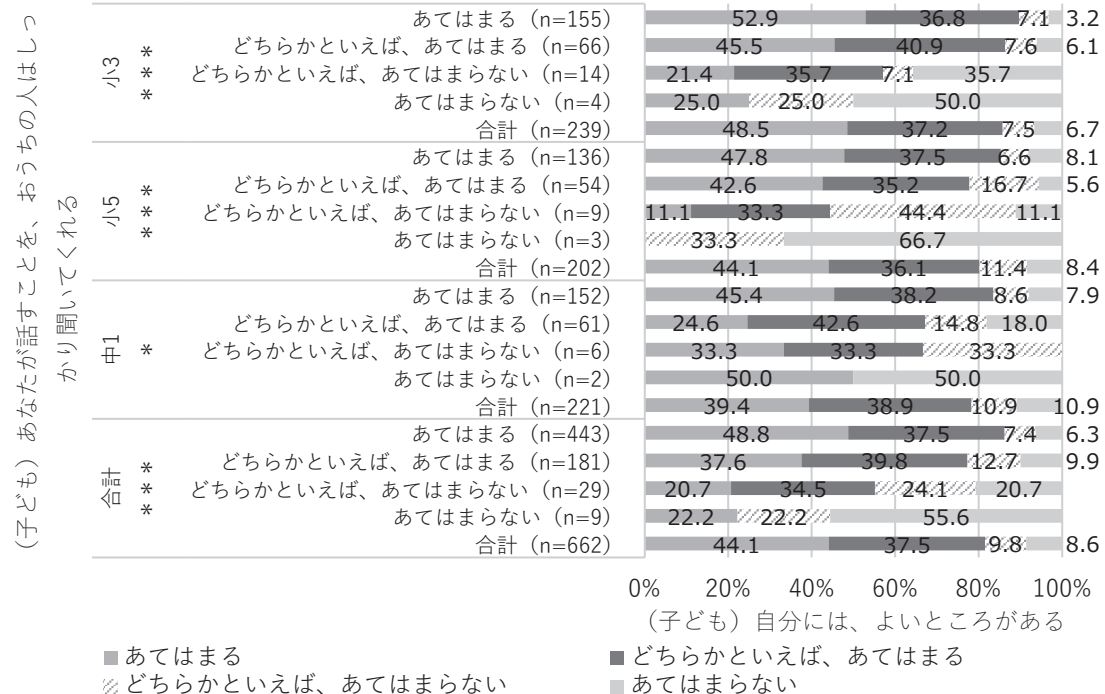


図表8-17 「あなたが話すことを、おうちの人はしっかりと聞いてくれる」(子ども・縦軸)と「自分には、よいところがある」(子ども・横軸)のクロス集計

第8章 子どもパネルデータの分析 (2) 非認知能力



図表8-18 「あなたが話すことを、おうちの人はしっかり聞いてくれる」(子ども・縦軸)と「自分でやると決めたことは、やりとげるようにしている」(子ども・横軸)のクロス集計



図表8-19 「あなたが話すことを、おうちの人はしっかり聞いてくれる」(子ども・縦軸)と「自分には、よいところがある」(子ども・横軸)のクロス集計(修正SES1のみ)

6. まとめ

以上、本章では非認知能力に関して、さまざまな項目との関連を見てきた。非認知能力については、学力ほどSESとの相関が強くなく、それゆえSESが厳しい状況に置かれても非認知能力を高めることがひいては学力を高める、すなわちレジリエントになる可能性があるとの指摘もある（山田 2021）。たしかに本章での分析においてもSESと非認知能力に関連は見られるが、学力におけるほどはっきりとした関連ではないように見受けられる。

他方、保護者のかかわりなど、子どもたちを取り巻く環境要因が非認知能力に影響を及ぼすことも今回の結果から読み取れる。それはSESが厳しい層においてもある程度共通して言えることである。これからデータを重ねていくなか

で、非認知能力に影響を与える要因についてさらなる分析を進めることは、「とよなか子どもプロジェクト」においても、引き続き課題として取り組むべきことであると考えられる。

【参考文献】

- Fujiwara, Takeo, Satomi Doi, Aya Isumi and Manami Ochi, 2020, "Association of Existence of Third Places and Role Model on Suicide Risk Among Adolescent in Japan Results From A-CHILD Study," *Frontiers in Psychiatry*, 11: 1-8.
- 三谷はるよ, 2023, 『ACE サバイバー ——子ども期の逆境に苦しむ人々』 筑摩書房.
- 小塩真司, 2021, 「非認知能力とは」小塩真司編『非認知能力 ——概念・測定と教育の可能性』北大路書房: 1-10.
- 山田哲也, 2021, 「不利な環境を克服している児童生徒の特徴」耳塚寛明・浜野隆・富士原紀絵編『学力格差への処方箋 —— [分析] 全国学力・学習状況調査』勁草書房: 92-125.